

# 記者の 視点



報道センター  
石井 せいいち

国による国立大の運営費交付金の削減で、各大学が難地化している。道内の国立大も教員削減などの経費切り詰めや、成金の量産が迫られている。ただ大学の基礎体力には差があり、一律に競争させれば大学間格差が拡大しかねない。十分な外部資金が見込めない大学には交付金を手厚くするまでも、個別の事情に応じた対応が必要だ。

北大では2016年8月、人件費削減案が評上。教授205人分という大規模な内容で学内から反発が相次いだ。12月の次期学長選で現職の山口佳三氏が敗れ、当初案撤回されたが、一定数の削減は避けられない。

北大は07、16年度で人件費の比較的高い教員が41人減り、助教は46人増えた。助教は最長5年の任期制が適用され、大学にとって員割増が容易な採用形態。助教は任期のないポストの獲得のため論文を量産しなければならぬ。理学部30代助教は「10年では長期的な研究に取り組めない。学生が大学に残ると思わなくなる」と嘆く。

小樽商科大は13年度から、北

## 国立大の運営費交付金 格差生む減額 個別に配慮を



北の次期学長に採り、記者会見する和善馨・工学研究院長(左)。学長選では人件費の削減の圧縮を公約に掲げた。2016年12月、北大

見工業大も本年度から、定年退職した教員の後任を補充しない「不補充」を行い、北大に先駆けて教員削減を進めている。

04年度の国立大学法人化は明治以来の「画期的な大改革」と言われた。政府は護送船団方式に終止符を打ち、国立大の目標として競争上の自律などを掲げた。各大学は企業との共同研究など、外部資金の獲得が求められるようになった。

だが、国立大と一口に言っても研究能力の強弱によって外部資金を獲得できる力は異なる。理・医療系の学部を持つ大学は獲得しやすいが、文系の単科大学は民間企業から共同研究の依頼も少なく、限界がある。

一方、文部科学省は16年度から交付金の一部を各大学から拠出させ、大学の取り組みに応じて傾斜配分する「重点支援枠」を導入。防衛省も15年度、軍事技術に活用可能な基礎研究に助成金を出す「安全防衛技術研究推進制度」を始めた。

政府は国家の方針に従順な大学を育てようとしているように見える。北大は文科省の意向を踏まえ、17年度に三つの国際大学院を創設するなど、国際化の推進に懸命だ。関係者は「文科省の意に沿わないと生き残れない」と漏らす。

交付金の額を決める際、外部資金の獲得能力は考慮されない。これでは資金力のない地方の大学は疲弊する。受験生にとっては授業料が比較的安く、実績のある国立大の価値は大きい。受験勉強の末に入学したのに教育や研究の質が低下しているという事態は避けたい。地域に生きる私たちも国立大の行方に関心を持ち、将来像を考える。それが、さまざまな風圧から国立大を守ることに繋がると思う。

運営費交付金 国が直接運営していた国立大学を2004年度に「国立大学法人」に衣替えしたのに伴って創設された。主に人件費の財源となり、学生や教員の人数、各大学が立てる中期計画の評価などに基づき金額が決まる。国の財政が厳しいため削減され続けており、16年度の交付額は04年度比11.8%減の計1兆945億円。文部科学省が16年度から導入した「重点支援枠」は、各大学から交付金のうち0.8%~1.6%を拠出させて再配分するもので、17年度は道内7大学のうち、再配分額が拠出額を上回ったのは帯広畜産大、北大、道教育大のみだった。

# 商大生が子ども食堂

## 14日から週1遊び、学習支援も

食事に1人になりがちな子どもに料理や居場所を提供する「たろっこ食堂」が14日、小樽市緑1の民家「ポッケの家」にオープンする。小樽商大の学生が中心となって毎週火曜限定で運営する。同大2年の白戸敬登さん(20)は「企業や個人にも協力を呼び掛け、支援の輪を広げたい」と話している。(三坂郁夫)

食堂開設は、同大の「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト」(マシプロ)を履修した学生が昨年6月に1日限定で子ども食堂を市内で開いたことがきっかけ。賞味期限が近いことなどで廃棄される食品を、支援が必要な人へ届けるフードバンク活動に取り組み、同大1〜3年

の5人の学生が中心となり、継続的に孤食や貧困問題に取り組みようと企画した。たろっこ食堂は午後5時〜7時に開放し、学生や地域のボランティアが料理を作って提供するほか、おもちゃで遊んだり、学習支援を行ったりするなど、社会性や協調性を学べる場所にする。

食事は大学生以上が1食500円、高校生以下が無料。食材は企業に余った食品などを提供してもらうほか、個人にも運営資金の支援などを呼びかける考えだ。運営は主に白戸さんら学生5人でつくる団体「クリーム」が担当が、調理師免許を持っていたり福祉施設などでボランティアとして働く20〜80代の8人もスタッフとして運営を手伝う。

民家を管理する前小樽市保健所長の秋野恵美子さん(65)も運営スタッフとして支援する。昨年、商大生と子ども食堂を運営した市生活サポーター「たろさほの菊地英人」主催は、地域で子どもを育てるといふ意識がまち全体に広がるきっかけになれば」と話している。



14日のオープンに向けて準備を進めている運営メンバー

参加申し込みや問い合わせはクリームのホームページ (<http://cream.nakai.com/>) まで。

## ■ 好天の雪あかり バックヤードツアーに32名 (2017/02/05)

ツイート

好天に恵まれた小樽雪あかりの路3日目の2月5日(日)、メイン会場周辺を点灯前に散策するバックヤードツアーに、本州や海外からの観光客32名が7班に分かれて参加した。



バックヤードツアーは、おたる案内人の有資格者が、会場周辺の町並みやイベントの準備風景・歴史的建造物・雪あかりの路誕生の経緯などを解説しながら散策する無料のツアーで、今年で9回目を迎えた。2015年に192名、2016年に169名が参加した。

今年は、2月4日(土)・5日(日)・11日(土)・12日(日)で例年より1日少ない4日間、15:00から16:00までにホテルヴィブラントオタル(色内1)に集合し、5、6名ずつ集まった時点で随時出発。

運河会場の浅草橋から運河散策路を通り、中央橋から小樽駅前通りを上り、手宮線会場を通り、色内駅前ではワックスボウルやスノーキャンドル作りを見学し、1時間ほどかけて出発地点に戻るコース。

5日は、16名のおたる案内人が参加して、ガイドとサブガイド2名ずつで班を作った。2班目は、静岡県など本州からの観光客男女6名が参加。おたる案内人マイスターの高野宏康さんがガイド役を務めた。

高野さんは石川県出身、小樽商科大学の研究員で、小樽の歴史文化の研究が本職とあって、分かりやすい口調で丁寧に案内し、参加者を楽しませた。

主に、小樽雪あかりの路に関連した内容とし、札幌雪まつりとの違いについては、「小樽雪あかりに路は、ロマンチックなイメージでじっくり深く味わうまつり」と話した。運河会場では、小樽おもてなしボランティアの会員からの話もあり、浮き球キャンドルのロウソクも浮き玉もワイヤーも、オール小樽でこだわりを持っていることや、外国人ボランティアが参加していることなども伝えた。



また、小樽の暮らしの様子にも触れ、ロードヒーティングを話題にしたり、観光客目線に立って、聞いてみたい内容が盛り込まれ、参加者は満足していた。

ツアー終盤は、小樽観光ガイド倶楽部によるワックスボウルの製作やスノーキャンドル作りを見学。小樽ならではのガイドツアーを満喫していた。

静岡から夫婦で参加した人は「北海道が大好きで12回目の旅行となるが、冬の小樽は初めて。バックヤードツアーに参加して良かった。ボランティアが素晴らしく、大成功したイベントだと思う。小樽には楽しむ所が沢山あると知った」と話し、満足した様子だった。

バックヤードツアー 2月11日(土)・12日(日)15:00~16:00  
ホテルヴィブラントオタル(色内1)集合 参加費無料